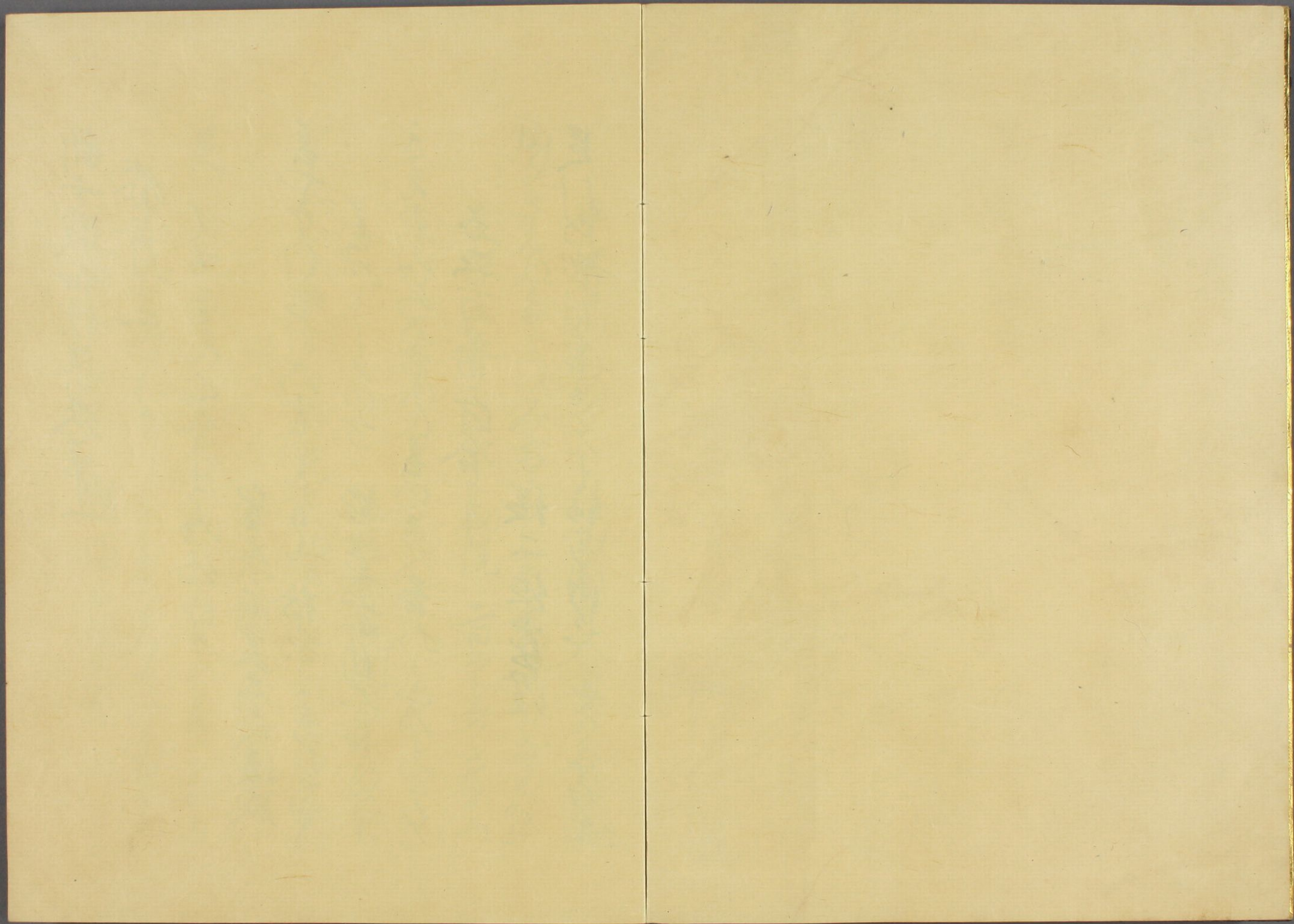




新千載和歌集上



石渠文庫



新千載和歌集卷第一

春哥上

しらぬらふらふとよみゆけり

皇太后文子文媛成

まやらの言けり雲の影にけし橋のよあはれは

まはれぬの言 衣笠前内大臣

ええあはれり言のまのこえ言はれおのまは

子百番方合り

後二位家澄

只このよは言ふまゝとてはつとてとてとてとて

早春のらと 後西園寺入道おの政子

ゆゑえぬあはれみ言まをてあふらりあふら

文保三年後宇多院百番方合り

つらつまのらとてあはれ

後照念院園白太政大臣

とてまを言ふははれし天原ゆりしをこれい

前大納言おの

只このよは言ふまゝとてはつとてとてとてとて

嘉元三年おのらとてあはれまらりけり百番方

贈後二位おの

よあはれ

去るは家来ふそまそりそめく山は海乃志系
春の方乃中は 皇太后文事俊成
去るはみささるいすめた杉智山ゆきみり山
建保三の国裏詩可合野外霞
参後雅雅

文保三年百そそりそそりそそりそそりそそり
民部つる者
打ふは里よりすめたりこられおまは燈まや立ん
部ーらす 園光院入道前実白老政官

去るはこころおそりおそりおそりおそりおそり
友原為道朝臣
こころはのりこころおそりおそりおそりおそり
文保三年百そそりそそりそそりそそりそそり

去るはかやうそそりおそりおそりおそりおそり
惠慶法師
和留乃尔家よりこころおそりおそりおそりおそり
いほとすそそりおそりおそりおそりおそりおそり

弘安元年龜山院より百首をうけりける時
まの奇 権中細云云雄

ふたつとふたつは浦風まきまきと波あつた鹿の如
貞和二年百首をうけりける時

入道二品親王の因

ふたつ浦や淡松えのまのまきまきと波あつた鹿の如
友原祐仲のうた家より十首をうけりける時
源後頼朝臣

ふたつとまの松ふたつと波あつた鹿の如
山階入道前太右衛門守藤原のうた子百松と

ふたつとまの松ふたつと波あつた鹿の如
前大細云云為家

子百すうりつとまの松ふたつと波あつた鹿の如
永保四年内裏子百

久我太政大臣

九重の雲あつたふたつと松ふたつと波あつた鹿の如
堀河院より百首をうけりける時

大細言云實

福のいふて二葉の松ふたつと波あつた鹿の如
元亨四年二月堀河院より十首をうけりける時
つりてりける時守りてりける時

後照念院園白を改む

今行ののいしそを言れたたきふらつこをさあ
百さうあめてこつりし河童く

前園白

はしと又言らり出く君代はあつと河と言をせ
建武二年内裏とてくむとこりて
あそふはくまうりける河春動物とふ
いふ

あふ納る實教

言れ智のちもや後をりすあそものちなるん
実治二の後院院白百さうをてま

つりらとまの朝言

前入納る氏

物かくのの言そや言れ年あつとまを
清徳云七十賀屏風前

入中后能宣物下

たはぬとれは山の言の霧とそやまを
言とありあふ納る云

あつふらつぬんたはぬ霧はらふ言乃と
三十首四方れ中に言中一寫と
とつとせ給りける

花園院御歌

常世のつねなるまをれし神々れ行とらむ心も
若菜はつとて移る 鎌倉若菜

春のまのふかまんと志めなほしむ 移るともみえぬ御歌
降子なる志の昔ふさきのよわふつひ人あり
かたふふふと 郁芳門院御歌

ゆめは行とのわふさきふさきのよわふつひ人あり
百首なるめさるし 次は降子の若菜

御歌

ふさきて移るの若菜ふさきのよわふつひ人あり
百首なるめさるし 次は降子の若菜

百首なるめさるし 次は降子の若菜

依母院御歌

まのつとれ移るのよわふつひ人あり
百首なるめさるし 次は降子の若菜

友原為遠御下

つとれ移るのよわふつひ人あり
百首なるめさるし 次は降子の若菜

つとれ移るのよわふつひ人あり
百首なるめさるし 次は降子の若菜

井のつとれ

六条内大臣

予めたきやうくこのとさのつをば里乃美れ梅え
二千首河方中し

後依貞院河家

去風い寒れやいふいさ梅くふり宿のりさ
飛山院より梅乃花とあそまうせ給
とそさみゆさふとそやゆ言とさあ
新よの梅れよあひとゆきり水さのり

月花門院

さひやふく^風さのあらしとあふとさり梅乃白を

性助は親王家五十首方り

前入納公為氏

吹風のうれやあ梅くい寒と白さきのゆくれ
前入納公為家くふ二千首方よとゆけり
梅乃混言とさうとさあ

深葱氏朝臣

咲初をいれあうらりして言れ白く梅れ下風
伴勢入捕家方合よ

よし人あか

浅みよりきのそららる言梅乃梅とゆいあか

野一らす

凡河内躬恒

梅久小宮殿よりいりてとて梅久のわきまのいりん

清原元輔

名よのあやまきと梅久のいりてとて梅久のわきまのいりん

建長五年後醍醐院より首より梅久れ

けり内庭梅と 大宰権帥為経

神久のいりてとて梅久のわきまのいりん

法治二年三月他国寺合り

前大納言為世

ふりてとて梅久のいりてとて梅久のわきまのいりん

野一らす

中務卿宗尊親王

梅久のいりてとて梅久のわきまのいりん

法皇御名

美の美れおととて梅久のわきまのいりん

梅久の梅よりいりてとて梅久のわきまのいりん

中務

みぬりてとて梅久のわきまのいりん

也

清慎云

梅久のいりてとて梅久のわきまのいりん

題不知

僧正遍昭

花見も色紙へおとす柳のいとけなきつらさなり

中細玄定補

春柳のあふこのしらぬるさよふそとくまはり

龜山院御歌

春風や柳のうきとまらるらんみそりおまゐる色みさうらふ

百々うらやめてうらりりりり柳

入道前太政大臣

はか娘乃初むらうきそくちのさあつ春柳の

むらう

坂京極拾政おと政大臣

首河乃若ねくく春柳のうらさねとあふ白浪

性助は親王のおの五十そまうり

并久細玄定為

風さう春柳のうきよむじととあぬ春柳の

おえ百々うらやめてうらりりりり柳

はか守定為

白浪乃じとふしはる春柳の玉れとけり春風そ

ゆめとあつ

契をい玉まうくさく風さう恨とくしまのゆめ

文保二年百々うらやめてうらりりりり柳

津守國冬

庶ふ所てうみじゆりゆらん人々我をよ
堀河院は河百そふそてまうりけり
ふつゆと
権中納言四任

まゝはらの元ふんりて物忘れすうりり
元享四年二月後宇多院十そふ
てまうりける時おふん

前大納言為世

そ乃まいととゆらんゆりれは兼光のり金
得返鑑筆項小兼とつ心と

土御門院は兼

昔とて好うゆゆふん兼光とふゆと
兼光ゆと
後西園寺入道前太政大臣

あまらう書紙やまふゆ金のふゆりり
ゆのまうりまうみらうゆゆゆと
てふゆ
山田法師

ふゆにゆりしゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆ
中院入右大臣

まゝゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
前兼後雅有

春とふと兼光ゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

又保百々方々をとりける時

二品法親王是也

思やほこもあえひまのや花給ふればまのゆりの

為花とふると 津守四也

ゆふとふるとりさうの極雲と為てゆぬ目さふ

徳治二年二月地洞方合り

贈後三位為子

よりふとよそけりうら人の極あつひ雲いかりとて

花方中に 前入細云為家

面影いよそふ雲いあらふ道たゆの極花は紅

百々方々あつりりり一時あかしくと

園白たふ也

あつとされし乃極軍ふり花の精よふ心とて雲

直政の位一品又とてまの時のりさし同孝

の屏風よ 前入細云為母

咲てわあつとてふらさるる雲とあら花の本とて

子五百番年合り年

醍醐入道前太政大臣

ゆれつらむかりきりふ山極花のふよふとて雲

前入細云為母とてさふひては性ちよ花

そしつとくふとくありしめしそしつとくせ
物しつり 天曆御製

咲初前ふそ様花あふふらふふふとあふ
部一らす 平益威 後

らぬまの雲とくふむとそららばさく様れ
あえ百とくふとくふりけり河花

正二位澄教

白子すれうしりわさ志心花と雲とれ雲と

あふしんを様う 右近中将義経

見ふれふ花の様咲しり雲は花の雲と

百とくふとく河 寺持院贈たふ臣

こふとくふとく様咲しりゆふとく花の雲

正中二年七月廿七日これ花の雲と

部とくふりて百とくふとくふりけり河

初花とくふとくふとくふとくふとく

後醍醐院御製

ふふとくふとくふとくふとくふとく

前大納言為世とくふとくふとく

方中に 氏部とくふとく

見ふれ花のりあふとくふとくふとく

心流と

法下長年

じよのまらふくみの雲の心は橋ふく心と云
建仁元年二月故有相院五十ヶ方合よ

卒道法師

軍おし雲と書ふらして心は心と云のま

前大納言源房家方合り

二條院禪師

風初る雲のつらりふきてくれ雲とゆふす二言

有尔花永都下いけくまのつらりを

毎まよせけり 白門院源家

まといのむやうつらと心橋みるくまのあつてお

雲林院よ雲みよゆらとそらそひつり

ふ新交乃女房又らひて白門の雲り

ともらんと中をらり物まふそお

ふらふらひつらと

くまのつらす

山をたると心と心乃もみおといらりそゆふ雲

前大僧正道玄

花ゆつて回るくそまらぬと心ひらねたさる心

千五百番奇合り

西園寺入道前太政大臣

為入家もふくむものごとくしめて出づ心あつた風

貞和二年百うらなをりし時

前大納言為定

祢ふいひるまをれ様嘆きくくつふあ田ん

花のふく雲

新千載和歌集卷第二

春守下

花園院位よむましくけり時朝觀新音
の候と以後んせさせおつゆてよ事新給
けり
伏見院御歌

まふわ老木の様よりぬまのわさささうみゆさそ
建保二の二月廿日南殿よ出させ給て
瓶花とらつとよとよ事を行けり

順徳院御歌

百あや花も昔あともあてぬら新梢よま風を吹

依見院位よなましくきり付られおのこ
とも庭苑感久とくふとつとまりけり
後二位為子

九重ふ白ひさのり様苑めとまぬあのみり代おん
山苑とつとくともとつとまりけり

後鳥羽院御歌

吾輩の雲かふさのり遊の系れぬえぬやの整あ
形——らす 後宇多院御歌

嵐ふれし吾輩やらとらん様ふりゆ遊の系
法治二年二月地洞方合り

正二位階敷

嘆けくおふ様のなきみえそあらしゆらぬ殿の白雲
は平覚源日吾社よそ七首方合りゆ

時 法眼源義

初日さし梢いせよあらしと山乃様雲とくらす
恙方れ中に 後鳥羽院御歌白たなは

吹風よ白とそくゆふあり苑のまゆら殿の白雲
家五十五そつとつとまり

孫正平邦首親王

恙風のよわらせみりの雲と苑とつとまり

建武二年内裏より人々遊ばさるりて
子そつ方はくまうりける所ありん

二品は親王是助

家々の名もいなりし山橋白ひてそねき風そく
後醍醐院いまもみされ交と申せり所の方
合よ山花と 権大納言の明

君こそ多しあつまれ山橋こそあそびのたのしみ
前大納言権房家守合り

前大納言兼宗

白雲とわらふもいふ山橋よそいふふれあはれ
いれ

百首方めりけりつゝいふ

後醍醐院御歌

本ありと知ふととそ我者よらのきんものあ
花乃方あましとゆけり中

故三条入道前右大臣

百首やみりの梅らねまはわさるあせよそのあ
宰相中納言よゆきり以林宗中花とつと
とよみゆけり 氏部公為
あつと花とつとあ九重れみと乃花は風そく
南殿の花はらんせき後拾考あり

ふらふの文水くさり殿上よさやゆ木
のこれ中に交つるさならし一技おせ
らとらるると水音よめしこおせしと
つとけり

後醍醐院御歌

九重れ雲丹のま乃様秋のまふ人のそとらん
水返し

後醍醐院

多とす秋のまふ人のそとらん雲おれまの秋とまふ
前大納言権房家乃奇合り

無部成歌

さふら雲おれまのそとらんまの秋とまふまふらん

弘安百とつるもそとらんけり時

後九条前内大臣

あそと誰かまふ心まの心花より也の秋とまふ雲
建武二年内裏とそとらん秋とまふりて
千首とつるまふりまふり時花

前権僧正雲雅

山嵐よりと雲れひまよとひり出る雲や山からゆん
前大納言と任人のりとなりけり秋の本と
あそよつるして物なれいひすひつまそ物
けり
よみ人不知

いふるまは形見よなりめつむとらつた風はあん
むしらす 平貞文

風吹むらく思やふらとらつた

長治二年閏二月中交節合ふ

権中納言國信

手紙をよぶそまは梅花梢の風さきのあめ

まふれ申に 大炊御門右大臣

樟ちくろふんよつ物あまゆこのさくあつたり

前大納言為世家よく方よくゆかり

花はなつとと 侍従為親

さかちりらるるのほとまをむしめ時のまを

あえ百そつめされつとつとよませ

けり 後守西院御家

いふのまをそまはれぬおぬわん人のふ

建長六年乙酉春合り

後醍醐院御家

吹風の恨い方そつらわらあまむせむとらじと

落葉とよみゆけり

前大納言俊光

吹風乃あまゆそつらわらあまむせむとらじと

花園院御製

春風ふくむるも夕言の梢のむすのふさくら

建仁二年二月和方御製と云ふ事あり

けの町書奇 後二位家隆

橋頭らりて心ゆき久堅れ雲かふらりて書れ心せ

野一らす 後二位成實

橋を空は白く風うらうら雲の影とてあす

前大納言為兼

さゆれ枝の緑つまふてむのけ花のさそふ

又保白事方とて云ふけの町

はる下定為

白く風はたふとてさそふもさそふのさゆれ心

前中納言雅孝

吹送る花とあふりて花さそけとてさそふ春風

百々奇とて云ふけの町花

お園白

山とてさそふ花の風と花のさそふとてさそふ

おのりて 為道朝臣

さそふらりて花の梢とてさそふのさそふ

花易散とて云ふと

如法三寶院入道前内大臣

らうらふよ又山を望みて春風の吹よ由り千らの梅が
依花納人ともふらふとよあり

設富門院大輔

今より世の便よ今まはしらまはわらうとふいそひり
権大納言延光れりよとて花見よ由り
よりけるふらりよとてわらうとあり

右京義孝

梅むきよみぬ程よあよより後のまきいふあふん
返一
権大納言延光

いよとて春よとてまらに梅の花の心はかたやあふん

寛治二年百々方多てよりりけるよとて

惜哉
冷泉前大臣

わらふあふんよとて梅よあふんよとてらひまらうと梅

大文前大臣の家方合より梅と

前参紙教長

昔よりくそんをけみひめあふんよとてはひのらふ
都一とす
あふん納言

今よりらりやあふんよと梅おむとて花よとて
は平長壽

志賀の浦や橋吹千の風よるさあぬ歌の浦波
野一らす ひとりあか

春風よあさつきて吾望川あはれゆゆの志
正之位知家

吾望川あつとあはれさえりあつとあはれさ
子也百書方合

西園寺合たあを政大臣
春風よあさつきて吾望川あはれゆゆの志

あえ百さつとあはれさえりあつとあはれさ
権中納言と雄

とせ川あはれ波よあさつきてあはれさ
源基氏御下

たさつとあはれさえりあつとあはれさ
庭のあはれさえりあつとあはれさ

とせ川あはれ波よあさつきてあはれさ
前大僧正親源

あはれさえりあつとあはれさ
とせ川あはれ波よあさつきてあはれさ

あはれさえりあつとあはれさ
乃扇よあはれさえりあつとあはれさ
瓊子内親王

独のあはれさえりあつとあはれさ

返—山吹乃あまふとて

陽子内親王

吹まふ扇の風乃侍ふといふそいあつとをみえれ
元亨三年八月十五夜は宇多院より
のあつとをみえられけり時

民部二為友

まの巻れ扇やあふとにしに家もあま月の影か
百と守りあそぶつり—時去月

入道二品親王は守

春のあまふといふにあまもとのあま月家初きん

前大納言為定

そい—とわしあをれ光と家よ白ふまのよれ月
六百番方合よ あ中納言定家
あつとをみえりといふく家もあま月家初きん
郡—らす 後二条院御家

まゝあまふといふ言よつと家もあま月家初きん
元亨三年八月十五夜月あつとをみえり
せられけり次よつと家もあま月家初きん
はつとをみえりつと家もあま月家初きん

前大納言為定

を山田の苗代ありとせぬ多とゆへうあつ母は海をせり
性助は親王家あり五十そつううみ約けり

津守國物

かきとめぬおそれあつ又波こえてまれば別は鳴らる
郡——ら子 津守國道

かきとめぬおそれあつ又波こえてまれば別は鳴らる
百そつううみ約けり時款冬

前田古伝

かきとめぬおそれあつ又波こえてまれば別は鳴らる
かえり年百首そつううみ約けり時款冬

後照念院園白石段古伝

吉野川を流るる流し新みえて地も若くすもこれおそ
子五百首そつううみ約けり前入僧正慈鎮

立つりたれあぬ有あついとくつらふふあつとたり
親慈元年三月そつううみ約けり
有とつううみ約けり

法皇御製

とれおつりての松よふふらむもくくまき池のあつ
也長所時死書今有案ふしあり

藤原敏行御下

友のむ風あはれむの事おぼしめし

むしらす 一ふか

善日聖の存らるひあふとみられんのおん

達智門院

新丹乃記あはれむとていふもまはらぬ

文保百三十九年りける時

後三位宣子

別録善の事れ書きたる日教とてあはれ

百三十九年りける時

河内家

あはれむの事れ書きたる日教とてあはれ

大納言政實母

ちる花とまらばれむとて日教とてあはれ

貞和二年百三十九年りける時

前大納言為定

秘よりあはれむとて日教とてあはれ

天徳四年内裏奇合り

中納言朝忠

花あはれむとてわらむとて日教とてあはれ

正治二年百三十九年りける時

皇太后御文筆後成

くつり美の別と行みよぬんりれを
あふれとてみよ

新千載和歌集卷第三

夏之

百首方よのませ拾りつ所

花園院御歌

あらしふらふをいふも
文保百首方よのませ拾りつ所

六條内大臣

たらしふらふの
百首方よのませ拾りつ所

前大納言御歌

引一教のころに於ては、
又保百首よりして、

あふ細く為る

まこときふおこころの唐衣身ふらふまねの
なつ方れ中に 後之位宣子

おこころのきむらぎをきかてとくふまらうて
院御歌

何してきまよふ心をも極まの梢よとゆふ
四月一日郭ふれ鳴けり

後醍醐院御歌

思ひねもふらやう物さにはひも何の何
おのころのませけりけり

後赤松院

なきぬあり卯月のまはれ何よりゆくの物
郭ふれぬ山よとらひて中にとくぬ月も也

三年その四方中に里何よりとく
ませけりけり

後醍醐院

ともと里あまふら何より卯の月
文保百首よりして

後光的照院前雲白左衛

五河の里丸をこの卯にふまぬ迄のすすもを

かえ百さう方をりけり所卯辰

今出川前左衛

夕に光とそく玉河の里丸をくわき卯の

卯一しすよしんふ知

久き月乃ひししあぬあうくは里にさきうれ

中務の宗吾親王

あきねとあふ新のせ白お卯辰の入り月

友原雅宗親王近清まつとも卯辰の

けけ約きり 前中納言雅孝

とゆて中納言きさうつあふひ弟もえぬ契りお龍や

正治二年百さう方をりけり時 吾ん

あ中納言定家

りらう弟れゆりふゆねたきそゆる河原丸

貞和二の百さう奇めされし時

等持院前左衛

神の松れ下弟よあし約日るあつたす

百さうよ河原と進子内親王

思ひねふひてむる河原も秘ねよふとさうの

文保百三十九年冬十二月

津守國冬

足川の山河を約しおぬさうひふしたのころふ

賀茂社よふみくをりける百三十九年

源邦長約下

契あふたのまきおせよ河をうらのをさうねをま

郭云云とてよあり

な尔為遠朝臣

まてさう初書ふねらまおれもうみぬはの河を

坂二条院河家

初書まわ我を志進の河を人よりされふえようみ

我をぬんともうらり郭云云年いまいあつ初書とれ

権僧正深守

つひあふとらぬはと河をこそあつ初書とれ

前入納云為家

あふらんと思つす郭云云月あまのねらうゆ

坂鳥羽院河家

郭云云のいよあはりのすや三月初書おそのあつ初

中文云云云

そのつひあふとらぬはと河をこそあつ初書とれ

阿多人傳よのこさくこ志の身れねかすねねと
中務乃宗并親王家百三奇に

正三位重氏

さくを我よあつを阿多これ初言とあふ
元亨二年九月廿内裏にて百三奇
緝せられけり次よんてとさくりて方
はさくまりきり小月前郭云々

前上納言實教

あつたふ小はくを阿多の本城の月乃さく
百三奇中にて花園院御家

約出雲云られ月郭云行む初言と云々の
を郭云と云々

光の孝も入道お授けな言

阿多いゆの心やさあらんてる雲の外よあたり
前上納言の世よませゆらるる日社のみ各
よ雲郭云 祝部成久

さくをさくしてやあつた阿多さくさくさく
性助は親王家百三奇なり

春水紙雅有

さくをさくして阿多さくさくさく

永承六年殿上方合子郭云々

六條右大臣

うづねのまゝやゆらん時をわづらひて種ふまをば

友方れ中に 兼僧正桓守

里わらへていひまされ河を釣らんかの夢か住まふ

平維貞下

あそそしむふらふめ河をそのたあふらぬ住まふ

氏部公為友

あそめしむらひとら河を捕ふはあふれ住まふ

あえと年百そふらあそとらけり河郭云

兼中納言為相

河をいふとふらふ書きたのあそとらむむあそ

百そふらめされし河よあふしん

御覧

村むれ書らる月とまふそいゆらるる河を

あえ百そふらとらけり河

あそ納言為

あそめしむらひとら河をわづらひて種ふまをば

友方れ中に 兼僧正桓守

里わらへていひまされ河を釣らんかの夢か住まふ

百首方めらまじりつらふ

醍醐院河家

氏のみありあつたといふことよやたは早苗を
又保二年八月常盤井他国より奉れり
くむとさうりて方はつらまじりけり

早苗をよめり 後光の醍醐院前園白たを

そとに氏の子苗よりつら物もあひつら
百首方よめせ給けり中におりん

土河門院河家

あふもつら苗よりつら物もあひつら
水

百首方よめ 法下定因

むらせ川わらわら苗よめ入て神はつら
あえ百首方よめつらりけり河家

贈後三位為子

神のまむも袖よりつらぬ面影もよつら
前中納言定家よめつらりけり
あふつら方合つらりけり河家

法下定為

あふつら代のつらに妙つらつら
正中二年百首方よめつらりけり河家

権中納言云雄

梅の白ひらりや花子の朝よのらぬ形母はらん
百々方々そとらり一時急橋

寺持院増たふた

袖をきく首の初めをよそよそみそし朝のあはれ
入道おと改たふ

そと梅道ちらふ花のりよとせとわね首とる急橋
建武二年内裏うそくむとさうそ

あそふ方けうまうりけり急橋
入た前内た

はそむけよ急橋と白ふん首とくけり急橋

貞和二年百々方々そとらり一時

後三条前内た

あそふ方けよ急橋と急橋の風ふさうそ急橋
急橋

梅の花は常と急橋と急橋と急橋と急橋と急橋

守元は親王家五十五と急橋

前中納言云家

あそふ方けよ急橋と急橋と急橋と急橋と急橋
急橋

平忠盛のた

安んじよ月あそとにけり時多し急いふとあつたは

前大納言為兼

今いもやとやりぬる五月あそと何れ時多し

順徳院御歌

五月あそと云わふあそと何れ月あそとれ新とすし
五月あそと又えんも何れ時多しあそと何れ時多し

僧正遍昭

五月あそとててんとあそとてあそと何れ時多し

よとててて

五月あそとててて五月あそとててて五月あそとててて

百とてててて五月雨

入道親王覚兼

五月あそとててて五月あそとててて五月あそとててて

あそとててて 中務卿宗子親王

五月あそとててて五月あそとててて五月あそとててて

洞院持政家百とてて

藤原門院少将

五月あそとててて五月あそとててて五月あそとててて

文保三年百とててて

芬陀利花院前雲白田宮

ふれはのこもしう首方けりまうり
次は照村とよまむ強うけり

伏見院御歌

いりすもふりやけしよもさうりもや藤のこい
百さうりそりりし河堂

大納言御實母

福よめとよもつ夢やこいそくの藤玉と
あえ百さうりめけり強よれかこい

後守御院御歌

よろひう玉とそりあつてさきさきの波
さきさきの波

都いらす

藤堂門院少お

あれ西よりのこいなるけりまむや
康永元年六月他洞とてこいさう
まけり河山もさきとつてまうり

権大納言御實友

芥つじんのこいやけあふりえて
むふ知 津守御歌

昭訓門院小徳

りこいの作とれ漢萩らそり涼
弟深さ病よりとまむとえぬ光そ風

百々方多きまうりし時夜草

た道中将義隆

夏弟れと云きくとも玉をみらしうすくも遠く
二条院のまき刀の交り中きり時帯刀
陣方合よ　　しんふ知

とあつた歌ありせむらふさきふくはるは
文保百々奇々をまうりける時

二條入道前太政大臣

里と云我とむくはるひ舟り河のくも
都　　らす　　後安門院

鴉舟く新河の浪は喜深てうつと深くもあけ

性助は親王家五十三奇々

前大納言為氏

大か川ひりくも海火のうりもあつたみよ
又保百々方多のける時

あま船をぬせ

五河雲のみねゆ月影のりてゆくあつた
樹陰友月とふもませける

伏見院御家

久々雲のりくも影かき木葉のりくも

和元三年八月廿五日夜
後照念院園白土政左大臣
時夜月

元亨三年八月十五日夜
元亨三年八月十五日夜
元亨三年八月十五日夜
元亨三年八月十五日夜

前大納言為世

百三十五
百三十五
百三十五
百三十五

踏り入る
為通御下

平氏村
始て方此
平氏村

後二位新
為世
為世
為世
為世

新子哉和歌集末巻并序

秋奇上

煉白の日にまをせ給へり

延長河家

ふとふとあふりたれ給ふと秋の風の音はあはれ

院河家

風はうら若陽よそよそと笑ひ乃下れらふ給ふは

ゆらけ方れと集ふそよまをせ給へり

ふら中ふはまふく風のこころと

法皇河家

うなまふく風の音はむらうはひらう給ふ

正和元年八月十五夜あそむる梅せれ

けつと秋朝とつらとまをせ給へり

坂伏母院河家

と物乃あはれ秋涼と風あはれてはるや梅の志

野一らす

あさまふく秋風をむの梅はうすまをせ給ふ

石清水社中首方と初秋露

正三位河家

このねわらむけ乃露よ神おもそ秋あつと秋露

あがり

夕露のつらさ

夜露前内大臣

小室三郎のつらさ
白露のつらさ
神のつらさ
氣負親王のつらさ

躬恒

よきよのつらさ
玉ふねのつらさ
中納言のつらさ

曾祢好忠

あつたつたのつらさ
杖のつらさ
すけのつらさ

建武二〇内裏のつらさ

子首のつらさ

孫正平那首親王

病状下のつらさ

秋のつらさ

吹流のつらさ

百のつらさ

前大納言のつらさ

そとつらさ

後京極持政のつらさ

此の朝に萩よりしるしを解ぬの麻は杜風を
百さうちまひしし時萩

前内大臣

善もつ風のやうに女を病むらうと此の萩の
権中納言定頼の可なりをうたふ所の
まへとさうちまひし萩のまへとむしとむし
よふちまひしはしるし

左大臣之位

りしるしにがと女を病む萩のまへとむしとむし
部一らす あふ納言資名

引やうな海の家を敷きしとむしとむし
貞和二年七月七日之そち方梅せられ
時七夕契久とむしとむしとむしとむし

法皇御衣

秋とまの年おむしとむしとむしとむしとむし
部一らす 故侍見院御衣

約とまのあえゆりしとむしとむしとむしとむし
元徳二の七月七日の内裏とむしとむしとむし
らむしとむしとむしとむしとむしとむし
きり
前中納言公備

あせをやはらぐすまらり月夜光しきふらさき

の栞

七の契とよあつ津守四道

天河船と契しよあつるやと平。お業おしやせん

百とちりまらりし時せり

入道前太政大臣

あしきよの向の庭に露とて玉のそとに枝をたふ

元亨元年九月廿六日飛山殿そとあ

はのこもむとさうりてち方はらうまつり

きり次よあつしんよのませ給けり

後宇多院御歌

織女はもそ又のうみと秋のなぬれ月やあは

むしらす 大細玄雅伝

あまはらふりしをこれせり乃星はとりの音高

中細言家持

天河船とてあつしんよのませ給けり

紀友則

了川船とてあつしんよのませ給けり

元徳二年七月七日首方梅とれけり時

七の契とよあつしんよのませ給けり

花園院御歌

舟がわたり水を系れ打ちいさ涼しくぬれ天の川を

セウノ船

天河川の舟がさき船よつまじく舟とつらじ

部 一 らす 大京大寺大形捕

セウノ船がさき舟よつまじく舟とつらじ

又保二年七月七日内裏より約方と合

まけり時セウノ地儀とつらじと

民部 一 らす

天河川の舟とつらじとあせりてしつじと

文永八年七月七日白川殿より人々

さつりてつらじとつらじと

後醍醐院 一 らす

つらじとつらじとつらじとつらじと

セウノ船とつらじと

つらじとつらじとつらじとつらじと

正中二年百々々々々々々々

前大細云 一 らす

天川一船つらじとつらじとつらじと

部 一 らす 後伏見院 一 らす

セウノ船つらじとつらじとつらじと

前中細云冬定

セリ乃其百枝名をく露ふれまそくまわらぬをいひ

正安三年丙寅よセリ乃七をそまの梅せれ

ける時 後之位を理

セリ乃雲の名いそつよまそくそくまの月日

文保百をそ命をりける時

は平定為

セリ乃うまそこのまらるる立川音はひこのま

正安二の七月七日をそまのきりきり

よまをゆける 後二条院御家

別海乃形見もまそく夕月秋晴やまの星を

部一らす 和泉武部

年よまのゆとまのゆとゆとゆとゆとゆと

延長十六年七月七日をそまの子院をそ命

合よ ままの人ま知

別ていふまの物とまの星はゆとまのまのまの

笑哉社よまのまのまのまのまのまの

為 深急氏御下

露ふまの朝の奈れは露ふまの朝の朝の朝

嘉元百をそまのまのまのまのまのまの

昭孝門院一条

吹じよる雪のたむれ秋風よ露なるれぬ神や
山雲よすむ約きうらのりしうらゑこれ秋
乃きしうらふそとりりたれいづらう
けり
捕仁親王

秋風よお露あしうら我宿を山雲よらと露きうらけ
むしうらす
武部恒明親王

風よぬらうれ麻の秋きうら月影さひ深き山
貞和百きうらめされし時

前中納言雅孝

風よらう五津雲のれうら月しうら輝乃影やきん
月十首うらうせゆけり中し雲同約
月よらうしうらゆをけりきん

伏見院清家

吹りぬ風を月もゆれらるけりうらその村雲や
むしうらす
中交上中乙宗

乃らうらうし雲しうらうらうら月のおうらうらぬ秋風
前入僧正慈勝

一村の雲れけり出ふらり影の山雲れ秋のうら月
友原盛法

一条内大臣

くねと程とみまふらんくさく先のまをい書しよの月
元亨のここの七月内裏とて三首の方梅せし
けり河初梅月とてくさくさくと志忠の梅とて
ふりり考り 大納言師賢

雲乃とれ月もくくさくさくおんねらうくはのり
秋のさる中ひ た道大將冬通
あさうけさみは秋の月もくさくさくさくさくさく
中宮権亮よゆさくさく禁中月とて
くさくさくさく 為道御下

いふらん世とてさくさく九重の梅れまおふさく月ひ
殿上ゆらゆらさくさくさくさく月乃くまなくゆ
けりさくさく 大宰大貳重家
常らるる月乃光なるけりさくさくさくさくさく
部くさくさく 源基氏朝臣

位心とくくさくさくのりてさくさくさくさく月とみさ
内ふさくさくひて月とてさくさくさく
源公忠御下

言ぬとも思ひえおふ雲乃よは新れさくさく梅れ
梅乃中ひ 京極前開白家肥後

前入僧正實慈

此風の書の中にもやもえぬん書海の月のうらみ

橋

飛山院浄教

うらみの中られ橋の月とあや中夜にうすし海に

順徳院浄教

久しお空の雲のあえ海より月のあふ小松風そく

月前松風とふよと

前入僧正實

吹くお雲まの月あや星そ何處も海に松風

月前竹風と

後入僧院実因

色ふお竹の葉あや月あそつりぬ雲よりお松

前入僧正道性

吳竹のよから露よらそ星そ月とたすぬ松風を吹

久安百々方小

里と后交年俊成

秋の月をわひん我んはくふそそはくお松

嘉元二年八月十五夜松後宇多院より月

十首より集せしけり

お入細云乃也

わくろく物とまりてや松のよ月とあやら松風

花園院持明院殿よりわくせたりし

けり此月の鏡せんをまゝるるさう一帯が
せしあはくまのりあははるや水堂はる
らまてありふたれい母原のりいやを
くりゆりり 冷泉

ひとよりふささいとしるるをいあくれ世を月と
百さうりあてさうり一ヶ月 女系

なると為遠期片

月をそわぬは好のなまささうり人やあらん
前大僧心道玄徳とさうりて百さうり鏡
ゆるり同く 深意氏下

いそらふ物な味とく月ふさされ救つらん
百さうりてさうり一ヶ月

入道前大政大臣

秋乃月あゆすとし月ふつり我老らけあきや
前大細玄仲郎
りくら老乃海もいささとし神よとく月とみま
郎一らす 後西園寺入道あま政大臣

袖あす三のくくされりいふ露乃霜同様の月
閑庭露いささとしとせ給けり

後伏見院御歌

あさり原よりぬき露の上ふらぬまにわら月が
弘安六年八月十五未内裏より月廿五日
梅とけけけふ 前大納言の意

そく露の光しきよれ毎の雲玉とそく梅の月
むしらす 人の貞重

し梅の光とそくそく露の雲とそく月と
曆慈之年八月十五秋地洞そくそく
梅とけけけの野 月のとそくそく
まつりきり お大納言云落

けりあやふいけの雲の末がそくけ月と露との雲花

法皇御書

と急とそくそく露の雲とそく月とそく
雲花百そくそくけの野 月

鸞司院師

武蔵野の雲とそくそく露の雲とそく月と
むしらす 後二位氏久

まねとそくそく月とそく雲とそく
平貞時朝臣

うらねの雲とそくそく雲とそく月と
丹波尚長朝臣

蘇そふ月とみまら杜月乃昔と秋を以て吹まはらん

よき人しり次

天の月乃みまらとみまら雲の宿られまら輝風

寶治百首を寄りける時後月

後二位新帝

泉川をの波も志のふくまきこまらにまら月け

赤元百首を寄り月 増後二位為子

約む河をいづるまきまともはれまら秋のよ月

元亨三年八月十五秋後宇多院よ月

み十首を寄りける時輝月

前大納言為世

左の川やまら秋のよ月乃少ふとみまら

中務卿宗尊親王家を合り

お春秋徳信

秋のよ月乃少れまら川はさきまら子波の音

文永七年八月十五秋内裏を寄り

海月 山平合前大政大臣

あつ海のちりまら海風乃吹上にとまら輝の音

百首を寄りし時月

右近中将義隆

伊弉波の海のよきとむ月乃新をさす此諸は
前々細を為氏すしめ物なる玉津嶋社三
その言合よ徳月 源親長下

玉の嶋やとら月乃新をさす此秋のよきと
む 津守國重

やとら月の新をさす此秋のよきと
む 後二位新

あまの海は秋やのよきとむ月乃新をさす
伏見院御

かきとら月乃新をさす此秋のよきと
む 月新

今月十日首より中を結けり時海月と

西園寺入道前を設けり

月乃新は秋のよきとむ月乃新をさす
此元百をさす此秋のよきとむ

百秋の院

とら月の新をさす此秋のよきとむ
む 津守國重

ふあはと海乃新をさす此秋のよきとむ
津守國重

伊弉波の海乃新をさす此秋のよきとむ

源信明下

煉乃此曉之月れをさそそささひら

人丸

おまの原雲あふかこしむ玉れよわら月ひい

伴勢

いぬしおよぬ月影のこままひはるん

和奇下方合よ満色月と

後鳥羽院御歌

あふよふのふれむんまらたをめされ

後醍醐院のまをみこれをちけり

おそ方合よあひらと

侍後為親

そまのこのみえわらうはれはとらり月を

お先百をさうとてうりけり月

前大納言為母

あふよはるる月けを清思の雲の

あつめり

新千載和歌集卷第五

秋寄下

野一草

よみ人ふ知

独り草なる秋の夜見えしにめでたき秋を思ふ

後二条院御歌

秋風と秋をふ吹ぬさへ此のまゝ秋なるもや見え

ゆふ秋なるれさふく奇よのせ秋けり

時雨さよふらんよふと

依母院御歌

とらやさ秋白ふらんよの志さくの秋露は

秋四方中に

依母院御歌

麻の香とと里を秋の秋に神ふもてうら

貞和二年百々方守りし時秋の奇

前大納言云

秋露の秋なる風乃らむきいひし麻を妻に

後三条院御歌

か夜とそ麻のつまこふ草乃枝は露やそらん

寛治二の百々方守りし秋麻

後醍醐院御歌

さくの神も露げさるよ夜つまこふ草とそらん

文保三年百々方をりけり時

前大御公為母

うみ院夕の望より望よりこみつま恋ふ麻の端あり

むしーらす 権大御公云明

山鳥乃尾上れ月のます後面影をそや麻はあそん

津守四助とこめ物もろ佐右社方合よ遠

宵麻とらふとこ 法眼慶融

松風乃夜よつまそとこいれりむの麻をうらふとこ

秋方中一ふ 徳倉右大臣

夕風とつま立とこをうらふとこ麻をうらふ

祝部成國

山とつまのすむ望ふつまとめて雲麻のいよはる

文保三年百々方をりけり時

芥池利花院前雲白因右

初瀬の妻とらとや雲麻のいよきととこ麻はあそん

むしーらす 常盤井入道おそはる大

秋とつまをそつまとつまの神の露をせむし

建保二の秋十五の方合り

僧正の意

さよのけとつまの雲麻とつまの雲麻とつまの雲麻

元弘三年三月屏風より田家のけりし小庵の
ゆきとす

秋の思ひの唐紙をらこらにいとあまを麻を
子五百番方合ふ 坂京極坊政前土政土佐

いねそにかりの田子けり枕書ふねとれ病をひま
むしーらす 天台座主植高

ひかりさしたるなへなり志がよふるに枕む
大い高廣

輝さしと病をさしよふし田けりあつと多村より
前大納言為意

あさらのをねとめつとて病おしむらう
むしーらす 為道朝臣

とふとに神やとらぬりか海あそふ秋の志と病
道徳法師

夕暮れ海よそらぬ病あふ秋のけりし
法中定為

霧やとふとひやまら我神の海そあえぬ輝の夕暮
坂園光院前園白土居

うらむらあふに乃りか秋の病あふ
貞和百々方とてふらりし時

前大納言為定

いふもぬいひきれとけりしむじさされ秋の言
弘安百三十九年八月二十九日付

二品法親王是助

三十一日ふりかして一音の岩がきらす秋の言
永仁五年飛山殿乃其言合よ聖介
秋風 後苑山院内大臣

とあつりわりの小藤うらあひさとのふゆくと秋の言
むしらす お中納言有忠

いふせんきしとてとるふされよあまら秋の言

百三十九年八月二十九日付

首道法親王

時とぬ我身とけりふとひりあけさくらふ秋の言
秋の言れ中に 権中納言雄

あつれと秋の言とけりふとひりあけさくらふ秋の言
位よわらゆとけり時とけり秋の言
おのこもとけり秋の言とけりて秋の言
やせらとけりふとけりて秋の言

朱雀院御教

年とぬ我身の言とけり秋の言とけりて秋の言

龜山殿より心家草花とてつと

後醍醐院御歌

君之あて今も庭とぬふれ心乃枝の秋菊の花

百々方より一時秋

権大納言實俊

露も神もそとる雲のささり雲乃露の露より

赤元百々方より一時日心

贈後三位為子

秋風よこしおらみらの秋思より秋菊の花

元弘三年立石守人屏風より

前大納言實俊

いよひのらりみとらん雲のや雲の秋菊

建武二年内家少くもむとて

子首奇しきりけり秋植物

源正平邦首親王

露もつおとる物と云ふれりし秋乃露の秋菊

貞和二年百々方より一時

大納言實俊

露もつ子粒吹く秋風よこしおとる秋菊

都より一時 前中納言直房

多しういふことありけりなむと云ふは
の権り

廣義門院

病ふりきり難の病やけしむをこそまはるる病は

元亨三年七月内裏よりうけられたる

二首よりけりけりけり朝草花

後山平前たふは

物とつりあひのふらぬまを白く秋の志し病

野草花とつりあひあり

大細玄師賢

白病をそとせしむる病はなむと云ふは

寛和元年八月十日内裏より合し

友原惟成

いふことありけりなむと云ふは

建保六年九月十三日内裏より合し

けりけり秋野月よりあり

順徳院御歌

いふことありけりなむと云ふは

建治二年九月十三日内裏より合し

梅とつりあひあり

後西園寺入道前大臣

鳴らす梅の影をいさのほを枕乃露もあまみなり

永福の枕

露をいさ葉はらひさつらそ下よいさの影をいさる

貞和二年百三十九年

長部公澄朝

あふら露と涙のつらやれさひもたてあやめん

前上細とる世よませゆきろろ中一り

庭虫と 法平澄剛

いささの露れやいとあはれも同くはらさあやめん

鳴らす 前園白たた

泣きえとらさる宿のあさるよ独りさあはれあはれ

中務宗高親王

あはれもいさしとそさる露のいささるあはれあはれ

虫乃影欲枯とららるとよませゆきろ

伏見院御親

初霧のさるあさるいささるあはれあはれあはれ

鳴らす 後園寺入道おと改大臣

初霧のさるあさるいささるあはれあはれあはれ

進子内親王

秋ふいさよわさむし蒼も枕らるあはれあはれあはれ

有原光俊の長任者社とて人々二十
六首よりよませ約けふ

後三位源氏

菘の志よりひあさらのそはまのつねを言わ
暁月中虫とてつとてとて

前入納言為世

虫のねと露れりりふしむ也聖の世の月れ左のり
初元二年後宇の院は百そそそ

町月 正二位澄教

町やらぬ長月のよれ枯風は初初れしとすあ月氣

元亨三年の八月十五秋月卒そそそ

けり河 氏部 づる者

殊ふは梢の風れ善そそ秋多ふ月の影そぬり

文永二年九月十三秋他洞五十そそ合

よ河月と 山階入道前太右衛門

久保れ天てり月乃桂河秋のこふひれあふあれつ

初元内裏百そそそそりけり河眺望と

後照念院園白を改た長

左のり月の波房ふ影みえてる風をそあそつと

雨後月とそそそ

河風の秋をよめらうとらひ月をよみし人の詩

西山乃弟れ序よきよあり

蓮生法師

月影の輝くよきよとぬれとも誰かこころをよめ

弘安元年百三十三のりけり河

梅家使資平

らじりるよ秋とまきと長月乃月れ秋とよめらう

梅家よきあり 法下洋弁

色らうらみのあきらめ初秋よ一秋とよきとらう秋

権僧正良聖

心らぬ秋をよめ秋の露れおとす秋のよきとらう秋

系久元年内裏方合よきと梅家よき

ととと 後久我を政と

けり秋の霜れ秋とら秋と初秋とよめらう

系元百三十三のりけり

万秋門院

よきとら秋のよきとら秋とよめらう秋とよめらう

ととと 法下寛懷

うねらふ小秋をよめらう秋とよめらう秋とよめらう

治暦元年九月家よきと梅家よきと

と梅一約けふ 土御門右大臣

おきて人のこころのなほもたゆまざらん
元亨元年九月内裏より人々を遣はし
つとて方合はしむらんけり時夜橋衣

氏部 公藤

いふふねえやとる秋のよはうさじつきてらん
百々方とてまづり 時夜橋衣

前園白

く 鶴北山乃里は秋風は初らぬしやらん
弘安元年九月廿日甚ふくそ三そ方梅

せれくろ時秋の暁

前大納言為氏

明初とて乃雲はひまみそて又立のりる
元亨元年九月廿日内裏より人々を遣はし
をれくろ時方同曉月とらんけり
まづりけり 前大納言實教

あらしとて乃雲はひまみそて又立のりる
百々方とてまづり 秋田とらんけり
つとて方合はしむらんけり
後二条院御衣

月影の口は面れぬこころをたらんけり

よも人不知

くさひうねをいふ菊乃むやを為あつらひのきり
長元五年十月上東の院の方合よ菊

ふくろのひとあつらひ長月乃あはれふれきり白菊を
河原院方合よ露光宿菊とふとと

あつらひあはれと白菊は露のやとあはれやとあはれ
弘安七年九月九日龜山院よ難菊露芳

とふととと穢せしはつらふ位よあつらひ
けりあつらひとせしけり

後宇多院御歌

子代よき菊乃あつらひよあつらひとむいひあつらひの白

前入納云為意

秋涼よ難は露も白ふやむらつら菊のあつらひ

又保二年百々あつらひとけりけり

お中納云責任

あつらひあつらひとあつらひあつらひあつらひあつらひ

長月やあつらひとあつらひあつらひあつらひあつらひ

あつらひあつらひとあつらひあつらひあつらひ

後宇多院御歌

長月やあつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

初秋のそよ風よよふらぬ紅葉はるの盛と惟よ世に

好忠

如心ありはるるの秋よよふらぬ紅葉はるの盛と惟よ世に

貞和二年百三十九年九月一日

中文子又宗母

心那の心はるるの秋よよふらぬ紅葉はるの盛と惟よ世に

弘長二子の後醍醐院よふらぬ紅葉はるの盛と惟よ世に

まうりける時心紅葉を

前工納公為家

紅葉とらふらぬの秋よよふらぬ紅葉はるの盛と惟よ世に

新しうす

心院前務政長公

高田一村の村の秋よよふらぬ紅葉はるの盛と惟よ世に

建武二子の心紅葉はるの盛と惟よ世に

まうりける時秋極物よふらぬ紅葉はるの盛と惟よ世に

新しうす

後醍醐院御製

立田心那の心はるるの秋よよふらぬ紅葉はるの盛と惟よ世に

百三十九年九月一日

御製

秋のそよ風よよふらぬ紅葉はるの盛と惟よ世に

新しうす

権大納言忠季

新の由て新の由とてもみえぬ式おふれに
飛山殿子とて可ふ

後宇多院御家

去秋の綿おとつりしに
建保二年旧裏可合り

上院御有家

その由とておのれ
文保百とて可ふ

上院御有家

おのれおのれおのれ

百とて可中お同

前大納言為氏

音の由の由お
建長二年仙洞
火倉の由の由
紅葉の由の由

後醍醐院御家

ゆつておのれ
建長二年
うしつり

中世なまきけり 後醍醐院御歌

夕月夜をたれ露の名のこして山を下る花の葉は
むしーらす 後二条院御歌

けりあはれの花を名はし夕月山と雲はくそ打留
惟高親王

八月ふるところをいお葉はくそと風はくそと
前大納言為兼

色くらまらとけりくりに返ると志くら花の葉は
友原景徳

花の多しとの名はくす葉はくす河をいおとす

元弘二年乙未名屏風奇し紅葉と

藤原為冬御歌

とてくはあといふそと色くら河をそ花は紅葉
むしーらす 前大納言實躬

音こいふ河を深くて葉はははは紅葉は
百そ方なりし河の葉

寺持院福丸御歌

露河をふり出く深く紅葉やうそ河をいおとす
露深紅葉とくす

よし人志し

白露乃深る紅葉のいづれにうらみおふくも
是長洲時水屏風乃奇

紀貫之

おの河原のこころいそよのこゆらふいそよと深る
文保百の奇をそとつりし時

前大納言為家

ふやうの秋夜をいそよおよそをいそよのいそよと
九月よりいそよの山越しけりふりみら
のうらみとつるをいそよ

友原清正

みら葉乃おふくをいそよいそよのいそよと
部しらす

友原泰經

ふそよの秋乃おふくをいそよいそよのいそよと
秋のいそよは紅葉とわけて友原秀茂
うらみとつるをいそよ

深草泰

おの河原のこころいそよのこゆらふいそよと深る
也し

秀茂

ゆきと雪とふくもいそよのいそよと深る
お元々年百の奇をそとつりし時九月也

前中納言為相

正安元年九月乃此紀業とありてくらふ
まゝせ給とて 遊義門院

あるやとてまゝの紀業もこの色に深る
山越一 後二条院御家

乃そそつて河の紀業とて心此方の紀業
中院入右大臣の紀業とて
けり 神祇伯部仲

あまの紀業とて河の紀業とて

五百番方の合ふ 西園寺入道前太政大臣

の紀業とて河の紀業とて
野一らす 源清為朝臣

高川の紀業とて河の紀業とて
寛長元年廿所入内屏風は紀業と
可 後二位家澄

高川の紀業とて河の紀業とて
弘安百の紀業とて河の紀業とて

龜山院御家

みらの下ゆきは影みえてらぬ梢を新よりの

寛政元年世所入月屏風に紅葉あり

常盤井合の政存

校とそめ治とそめの子孫をた下たる山の嶽乃志と京

三十首方よりせ給けり中一に

伏見院御歌

山をゆきまき山嵐をてまじくそめの子孫をた

秋の撰方合よ 後鳥羽院御歌

本じねとそめの子孫をた河をそめね色にも身より

部一らす 元捕

花鳥まのの枝にあまの御道と知れぬわねをた

百首のあまの御道 何九月書

た道中将義詮

天保をくらとくらあけの別を新集り一とすうの秋

あしーんや 平政村御下

いそやまの別よ身よりと海をいひはね志と

貞和二子百首の奇めしき一何

正二位澄教

やそらゆき別よとあ命りそ又長月乃きよとあ

九月書乃方とそよあ

大藏卿有家

この書は秋の別と今所ふべきを著す

何うせん

新千載和歌集卷第六

冬奇

正中二年七月廿七日内裏より

さうりて百首を方けり

前久細云

若もそ梢よりぬ風もけり

順徳院御歌

若殿川にけり

子五百番方合ふ

時ふとらほとをみす

寛和二年殿上奇合り

鏡人しらす次

初阿ふふれ山望いふしとまじり山や神のわらん

題不知

人丸

風よらるる葉のちや神さ月くおの阿るりらん

元亨元子十月八日三々方合よ時雨

坂守多院新家

おのらとふれ木乃い深とそく雲のしりく小阿るゆえ

冬此山方の中に後鳥羽院新家

しりり木のたけふ乃まらうらん阿るもくも阿るす

相換

いふとれいれくろとつ神さ月ふとそ阿るれまふり

建保二子内裏三々方ふ時雨と

前中納言定家

山の井れ常とけし深そくあすふあめなりとそ

野しらす 友原澄祐下

神さ月よりぬされおまそく風ふ乱てふ阿るれ

お春秋為嗣

山あらる風乃巻とたよりそく雲のよそゆてふとれ

元弘三年立后屏風より

侍従為親

あつたれとふとひて雲の如風乃如と又とて

貞和二年百々方多てつりし時

前大納言仲昭

さつめく志く雲れれあつり日影さひを冬旅

部一らす

権律師一守

らり雲まれば日影てつりせとつりてそめ村時

俊安の侍一条

村時あつりや梅乃れ河のまもといささめ月乃影

祝部成久

ら雲乃れは福の出やして河多とていひの月

元亨三年の飛山殿にて雨後落葉とて

とてはつりきり

友原為冬卿

村時あつりし時の山風は霧なりあつた嵐の冬

部一らす

源清氏朝臣

そとあつたれはつり河多の本葉なりそを冬

元亨百々方多りける時

前大納言俊定

深つたりの綿がなをりて冬

元亨元年十月八日
後宇多院の御書
合よ落葉とあり

前中納言有忠

今より秋の風は
庭中院の御書
人の方合よあり

刑部卿花鳥

秋の風を
正治元年の御書
に

式子内親王

秋の月と云の御書
に

飛山殿とて松下落葉とあり

源正平光忠

吹風やその梢と
昭慶門院の御書
に

昭慶門院の御書
に

大宰帥世良親王

初冬落葉とあり

後宇多院の御書
に

後宇多院

永承元年の御書
に

永承元年の御書
に

中細玄祐家

寛治六年十月殿との初めは里に於て

寛治六年十月殿との初めは里に於て

まうりてりみら見約り時今ふらりて

しあり

田防内侍

古も嵐のこのお業は井を以てふは多めみりき

義保三年十月大お川の道遠より

ころりてふみくもてまつりけり

久細玄經佐

いふの初めは里に於て大お川の道遠より

郡一とす

清原深書父

いふの初めは里に於て大お川の道遠より

津守圓夏

音川落てもあふふらふらふなるれら殿の初

建武二年内裏より方おりしとあま

小約りてりみら見約り時今ふらりて

よ水

寺持院増た大臣

けしきの落葉ありやありは風ら坂の冬は川

永仁五年飛山殿命合よ落葉

後守多院河原

梅姫のまろや綿とみゆかお葉のこよふらけり
歌 一 らす よみ人か

河風乃やこあけのお葉らりしれこまこころ梅姫
有尔基任

梅姫乃衣まゆすこら造よ木葉吹くこころ乃
能登法師

りくらの木葉あこやこあけ梅よあぬ風の言れ
前大納言良教

お葉と吹まそりし風吹きのたれこらそら
後京極院

吹く梅とぶ乃風言そまらぬのくこやらん
霜埋落葉とらふと

式部之久的親王

庭に面よ秋のこころとあつらふ木葉もみまけり
貞和二年百々そらめされし時

入道二品親王等因

初秋のまろはやこころまの梅も露乃じよひ
霜とよまら 美茂経久

露らり庭のあさら風はそ枯葉よまらぬ
源兼氏朝臣

ゆきかきふりてしるる風よりの雲はあつた
建保五年 四月庚申 兼五ノ子ヨリ
如影法師

弟と本もさかしてあつた風よりの雲はあつた
百三ノ子ヨリ

権入細云實後

吹風はあつた秋のついでに霜はあつた
元弘三年 乙未 屏風ヨリ

二品法親王意道

そのついでに藤も霜をうけてひらふちあつた
茶

寺持院贈た大臣家方ヨリ藤霜

惟宗光之御后

藤の葉はあつた山もあつた
延 一ノ子

あつた秋の葉はあつた
性助は親王家五ノ子

前入細云為意

あつた秋の葉はあつた
冬はあつた

後二条院御后

しそふふふしてそらのねふと冬の子孫の霜

後宇多院御製

冬ふふふのふふを霜はしひ日とに女まらつ

元亨元年飛山殿よそ山家冬朝とふ

しそとけつらまらりけり

氏部よる者

霜ふふふぬふとそそり山路の霜よ秋の白菊

佛名乃菊苑と以後してよませ給

けり
冷泉院御製

秋ふふと霜新よふの菊の苑河とふとそらとを

寛治二年百と方なりけり河池水

有原信實朝臣

ひふふとそわとらるれ霜枯の冬雪ふけくは池の

建仁三年和方可とそ秋何よ九十賀たま

とせけり時の屏風より

皇太后后女中後成女

秋ふふとやしら水の初と光よみく冬れの月

冬ふふれ中に 津守國助

らりつらふ葉とねはぬふとらり社や乃招まの冬ふ霜

前大僧正道昭

初霜乃をさ出しくれば我れ暮るはひと月の影

後二条院御歌

よもさうねをさぬ我神よあまそと在の月を影

貞和二年百三十一とより一十

入道おとめをた

月さゆをさの影とさぬを霜よたさそと雲のく人

歌一らす 後鳥羽院御歌

そを夜あつ面影そとそゆ月さの影よめりあま

貞和二〇百三十一とより一十

前入納公為定

そのまに霜よりそと思ふそらあられ山阿ひ乃神

歌一らす 友原懐通御下

雲の上のそら阿の影の白影はそをされ暮る

元弘三年立后屏風は五節

源正平那首親王

まののそよあわら乃日を系被とひて霜じとそ也

中文太事云宗

海よきりふあひ乃神は風さえてひをれとそ霜は

歌一らす 二水は親王弟元

あまののゆかまそとやそら霜はそよ影の

熊野小御者入と云ふ事せ給りけり

白河院御歌

おきり風吹とれらり秋やらしむゆららぬ御歌
又保百さう方をりけり

三條入道御歌

吹上乃浪舟と云ふ事風はけの子を記すの事
續子哉集よつりてゆりてふてある

源宗氏

今も記ぬわかれ浦子高しと云ふ事
都一らす 前大僧心道云

君もあつむわかれ浦子高しと云ふ事
今も百首さう方と云ふ事

御歌

あつむに代はれと云ふ事
前大僧心道云

わかれ浦乃り波子高しと云ふ事
和方前と云ふ事

五秋門院御歌

と云ふ事我と云ふ事
元亨三年十二月廿二日

文保せしむる時浦子鳥

権中納言云雄

なまきりさうらんおふら海より道昔はし海は
都らす 法布雲祥

天風は都らさうらみてあまのこし里はるるさうら
大の貞重

波はらぬらむらむらふらふらふらふらふらふら
文保百首云うよ 忠房親王

はよさうらさうらさうらさうらさうらさうらさうら
赤元百首云うらさうらけりけり時千鳥

正二位澄教

とがせふら波ぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬら
都らす 藤原為重御下

伊をれ海なるの漆入とらふらとらふらとらふらとらふら
文保百首云うらさうらけりけり時

前中納言雅孝

雄波らぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬら
海色千鳥と 後惠法師

立の月影らむらむらむらむらむらむらむらむらむら
建保内裏百首云うらさうらけりけり時

僧心行意

うらまはぬ河のほとけとてむらさきなるをばか子とて
浦子とてむらさきとて

贈後之位為子

しよは海そくふ子とてむらさきとてむらさきとて
文保百とてむらさきとて

氏部とて為者

しよは海そくふ子とてむらさきとてむらさきとて
寺持院持たふ氏家とてむらさきとて
後持たる子とて 権中細とて為明

りらみとてむらさきとてむらさきとてむらさきとて

百首とてむらさきとてむらさきとて

前久細とて為者

しよは海そくふ子とてむらさきとてむらさきとて
先百とてむらさきとてむらさきとて

あ中細とて為相

しよは海そくふ子とてむらさきとてむらさきとて
正中とてむらさきとてむらさきとて

後醍醐院とて為者

しよは海そくふ子とてむらさきとてむらさきとて

百首方一もせ給けりし時

花園院御歌

ひらふ心算る雲の空はえそ月影みく木は白雲

夕月映雪とふふと

前巻後為嗣

夕まふ心算る雲の空はえそ月影みく木は白雲

冬奇れ中に 後花園院御歌

はえそ雲の月影みくこの空は白雲

百首方一もせ給けりし時

御歌

夕まふ心算る雲の空はえそ月影みく木は白雲

禁中書とふふと

後醍醐院御歌

夕まふ心算る雲の空はえそ月影みく木は白雲

後醍醐院御歌

夕まふ心算る雲の空はえそ月影みく木は白雲

御一とす 権僧正御傳

夕まふ心算る雲の空はえそ月影みく木は白雲

権僧正御傳

夕まふ心算る雲の空はえそ月影みく木は白雲

坂上是則

ふの事をもよもひしりての事とてさるる者もさるる者も
書れ給ふ源義行、許合ふつらりけり

前奉後能法

ゆきもつらるる事とてさるる者もさるる者も

返

源義行

踏もつらるる事とてさるる者もさるる者も

志山殿子とてさるる者も

お大納言之實教

秋もつらるる事とてさるる者もさるる者も

返

坂上中宮上総

踏もつらるる事とてさるる者もさるる者も

権大納言忠孝

ふりつらるる事とてさるる者もさるる者も

正中百とてさるる者も

二品法親王是助

冬もつらるる事とてさるる者もさるる者も

元亨二年八月内裏みくらつらるる事

ともさるる事とてさるる者も

月前書とてさるる者も

梅家使云敏

新よむ面影しめて音聲は月小みもる家はとる音
冬よ新しとてよめる

前入細云後定

ふて候もよそえつる音聲は梢とわすふわつ白雲
新元百首をなりけり時

法下定為

縁の音はむと本も白雲の音聲ふたりおまはると
むしーらす 友原重徳

やこの聲おさるとらむし音らりて何ら聲ふとら
云

百首新しとてよるりー時音

寺持院贈たふた

わらひ物なる雲のさゆらりやと聲とよそえ白雲
又保百首をなりけり時

申又ふ事入云宗母

もぬうよめやしけりつらむしゆはなけはる音
貞和百首をなりけり時

梅家使資明

も一響はたの乃君れゆのよまふととふ神の心
文保二年八月常盤井地洞より舟の

物らとすはあめり風きてくさるるを憂ふあり

祝部成久

昔てゆ年とてふらりて老ふつて月小御

前大納言云云

言はらふ言はる年とて言はるはつりて老ふ

お指僧正云云

とてあつて言はらふ言はる言はる言はる言はる

百言言言言言言言言言言言言言言言言

寺持院僧正云云

老のゆとて言はる年とて言はる言はる言はる

老後歳言言言言言言言言言言言言言言言言

法平禅澄

行め老しそらふらるる老の波あらもて年を痛

前大僧正花寛

とて言はる年とて言はる言はる言はる言はる

又保百言言言言言言言言言言言言言言言言

後照念院園白大政大臣

難波の御ねふらふ言はる言はる言はる言はる

言言言言言言言言言言言言言言言言

花言言言言言言言言言言言言言言言言

